存 在 論 と 論 理 学

速 川 治 郎

Ontologie und Logik

Jiro Hayakawa

存在論の立場から哲学的思索を行なった代表的な哲学者として、N. ハルトマン、ハイデッガーをあげることができるであろう。前者はアリストテレスの $\delta\upsilon\ \eta\ \delta\upsilon$ に立脚した存在論であり、いわば存在者を包括的に問題にしたのに反して、後者は存在者の存在を問題にしたのである。ハイデッガー的には、今までの存在論者はすべて存在者を取り扱っていたが、存在そのものには注目しなかったのである。たとえば、物がある、人がいるという場合の「ある」、「いる」を問題にするのが存在論であると彼は解釈している。彼はそれらを言語の使用場面において種々検討しているので、その限りでは言語哲学的な、または解釈学的な傾向を持っていると言える。たとえば、*es gibt* というドイツ語特有の表現方法を取り上げて、存在問題に関連させている。*es* が実は存在であり、そこから存在者が現われると考えるのである。

さて、ハイデッガーが論理学に対してどのような態度を持っているかに、ここで言及してみよう。彼は存在と思考とを取り扱う場合、論理学に触れている。「論理学は思考の学であり、思考の規則と思考されたものの形式との教えである。そればかりか、論理学は哲学の範囲内で、世界観上の立場や方向がほとんど、あるいは全く介入していないような学であり、課目である。その他に論理学は一つの確実な信頼に値する学として通用している。論理学は昔からこのかた同じことを教えている。なるほど、ある人はあれこれを省略し、ある人は補遺を認識論から持ってきてつけたり、ある人は心理学によって一切の基礎工事をする。だが

全般的には喜ばしい一致が支配している。論理学は思考の本質を詳細に問うあらゆる努力をわれわれから取り除いてくれる。」(M. Heidegger: *Einführung in die Metaphysik* 1953 S. 91) とハイデッガーは述べて、さらに、論理学の意味を問うている。論理学は *ἐπιστήμη λογική* つまり *lógos* についての学の省略形であり、*lógos* は立言を意味する。論理学が思考の学であると言われたが、それは立言の学ではないのか。思考は立言によって規定されるのか。このように彼は問いを投げかける。彼は思考の本質を規定するために論理学を引き合いに出さないで、*ἀλήθεια*, *φύσις*, 非隠蔽性としての存在等を問題にするのである。彼はまた、論理学は、哲学者ではなく、学校の先生が考察したものである。哲学者が論理学に精通したことがあっても、それは論理学について興味があったからではなく、もっと根源的な動機から出ている。伝統的論理学を克服しようとする決定的な偉大な努力がライブニッツ、カント、ヘーゲルという3人のドイツの、しかも最大の思想家によってなされたということも決して偶然ではないと言っている。ハイデッガーにおいては、論理学の思考形式、規則の発生以前に、存在と思考に関する根源的な洞察が遂行されていなければならないのである。こうして言語解釈が行なわれることになる。したがって、彼にとっては、論理学はまったく研究対象になっていない。しかし、言語解釈の行なわれる場に、同時に論理学が生起することも確かである。この例としてハンス・リップスの解釈学的論理学をあげることができる。リップスは *ὑποκείμενον* と *κατηγορούμενον* を主語と述語と訳したならば、アリストテレスが注いだ努力を歪曲して、ずらしてしまうことになると言って、次のように述べている。「*κατηγορούμενον* において、*ὑποκείμενον* はあるがままのものとして明るみに出される」「*κατηγορεῖσθαι* は、*ὑποκείμενον* が明るみに出されることであるが、このことはその *ὑποκείμενον* がさしあたり未知であるというのではなくて、さしあたり隠されていることを示している。しかし、このことはまさにそのあらかじめ理解されていること (Vorstandensein) においてそうなのである。*ἀποφαίνεσθαι* とは、ある物をそれ自身からその被いを取って見させることである。そして、この被いを取るという事態 (Sache) がリップスの考えでは *ἀ-ληθές* (真) なのである。このような発想方法はまさにハイデッガー的である

が、論理学を深く研究している点で、注目に値するものを持っている。

ハルトマンは存在者の存在ではなくて、存在者としての存在者の研究に没頭したのである。日本ではこの点でハルトマンの哲学を軽視する人がいるが、包括的な問題の処理、緻密な言語分析という点から見れば、すぐれていると言ってよい。ハルトマンは存在者と存在とをどのように考えていたか。「存在者(όν)と存在(είναι)という語をギリシアでは明瞭に区別していなかった。中世においても存在者(ens)と存在(esse)とを正しく区別していなかった。実際に存在者を研究しないで、存在を取り扱うことは不可能である。したがって両者を分離することはできない。だから存在者についての根本的な問いを存在についての問いと解して構わない。それにもかかわらず、両者の区別をよく見ていなければならない。端的に存在的に解された一般者が求められるべきであるが、このものが存在なのである。形式的には存在論の根本的な問いは存在者についての問いではなくて、存在についての問いである。そのためにこそ存在者についての問いから始めなければならない。一つの問いの初めと方向とは同一のものではないからである。」(N. Hartmann : *Zur Grundlegung der Ontologie* 1948 S.41 f.)

ハルトマンはこのようにして、存在論を展開したのだが、論理学に関する本は出していない。しかし、論理学について述べていないのではない。彼にとっては、論理的法則は理念的-存在論的なものである。それは元来数学的存在に特有のものであり、この存在を支配している。したがって、論理的法則は数学的思考の法則でもある。しかし、論理的法則が理念的な自存(Ansichsein)にすぎないのではない。実在そのものがその構造関係において、とにかく、すでに論理的に秩序づけられており、われわれが自己の思考形式と見て、実在を把握する際に使用する依存の諸形式が一切の思考から独立して実在者を貫き、それを支配しているとハルトマンは考えている。それ故に、彼にとっては、論理的法則は存在法則なのである。

「第一格はバルバラで式は〈MはPである〉と〈SはMである〉という前提を示す。〈SはPである〉が妥当するかどうかはわれわれにはわからない。われわれは〈MはPである〉が妥当し、〈SはMである〉が妥当することを知っている

だけである。結論＜SはPである＞は、思考が推論、すなわち、式の法則のもとにある時にのみ、思考の中に現われうる。しかし、その結論が実在のSに適中しうるのは、初めから、S, M, Pの実在関係がそれぞれ同一なる結論の基礎である時にのみである。」(N. Hartmann : *Zur Grundlegung der Ontologie* 1948 S. 303)したがって、ハルトマンは論理学と実在との関連を重視していることがわかる。

ハルトマンの『可能性と現実性』は様相論理学的性格を備えており、その点で興味のある本であり、また『実在的世界の構造』においては精緻な言語（カテゴリー）分析が展開されているが、ここでは割愛したい。

ハイデッガー、ハルトマンのように、1) 伝統的、思弁的な思考過程を取る人たちは、E. フッサール、G. ヤコービ、A. N. ホワイトヘッド、H. ヒーラー、O. ベッカーであるが、この他に 2) 論理的方法、標識を利用する人たちとして、G. フレーゲ、L. ヴィトゲンシュタイン、H. ショルツ、S. レスニエフスキ、C. レイエフスキ、W. v. O. クワイン、G. ギュンターがいる。このような区分をM. ベンゼが行なっているが、これらの中でO. ベッカーとG. ギュンターとは特異な存在である。両者は数学論理学の分野に貢献しているが、前者はハイデッガー的存在論、後者はヘーゲルの反照論を前提にしているのである。また、形而上学を認めるH. ショルツは『数学論理学の基礎づけ』(1962)の中で、数学の基礎にある問題を提示している。彼の数学論理学は存在論的に規定された論理学であり、この基礎になる存在論は古典数学のプラトンの存在論であり、構成主義、直観主義、唯名論に対抗している。さらにベンゼが指摘した通り、量子物理学的な（不確定性関係、波動-粒子-二元論、物理学の完全性の問題）問題とサイバネティックス的なそれ（ウィーナー、G. ギュンターの意味における体系の問題）とが新たに存在論を受け入れているのである。

ここでは、G. ギュンターを取りあげてみたい。彼はヘーゲルの弁証法を重要視して、その形式化を考えているところに特色があり、またサイバネティックス論理学をも考えており、存在については思考との関連において、かなり立ち入って論及している。そこで存在についての彼の考えを問題にして行きたい。

思考と存在との絶対的同一という古典の定理が無制限に形而上学的に妥当して

いたが、これは新しい形而上学的な定理に置き換えられてしまう。すなわち、思考は存在より高次の形而上学的な力を持つという立場が現われると彼は述べている。さらに、最初の定理は第二の定理の中に三つの意味でいわば止揚されている。すなわち、1) われわれの思考の唯一の形而上学的基盤となつて、ここから結果として出て来る間主観的連繫を維持しようとする要求は最初の定理から失われた。2) しかし、その定理は新しい形而上学的定理の中に副次的テーマとして現われ、それは、思考内の特殊な存在問題（他我の問題）が思考に対立する客観的（経験的）存在者と一致するということを含むしている。3) 最後に、このことによって、古典的定理が普遍的な反照連関の中へと高められて、古典的テーマに新しい意味が生成するということを古い同一性原理は獲得した。ギュンターはそこでハイデッガーに触れている。ハイデッガーは形式論理学を排斥するが、その理由は、この論理学が存在者への問いにまったくきまりきった答弁をするだけであり、その論理学の法則に従うすべての思考は、初めから、自ら存在者への問いを理解し、真に展開し、自らそれに答えて行くことができないからである。古典論理学が存在を問題にする時、存在者の対象性を把握するだけで、存在の中に包括された無の非対象性についての問いを理解せず、また論理的にそれを規定しないから、ハイデッガーは古典論理学を拒否する。ハイデッガーの考えによれば、アリストテレスの形式主義は存在者にのみかかわって存在者の存在にかかわらないということになるが、このことをギュンターは正しくないという。現代論理学の計算は二つの部分体系から成立して、存在と存在者との関係のようになっている。「一方はフレーゲの定項の上に立てられた真理計算であり、他方はメタシステムと存在という基礎概念から、全称演算子と存在演算子との使用によって展開される。」また「ゲーデルによって見いだされた無矛盾性の超越性が有限的述語計算に対して超越していること、論理計算によって必然となった対象言語とメタ言語の区別、述語計算における命題階型の無限後退等々、これらはすべて、…存在という全体的基礎テーマにかかわるすべての答えを、一般に可能にする容器になっているのがこれまでの論理学である、ということに対する明瞭な証拠なのである。」（G. Günther : *Idee und Grundriss einer nicht-Aristotelischen Logik* 1959

以下 *n. A. L.* と略記する。S. 16)

哲学史的に、存在を問題にすれば、当然、無の問題も出て来る。ギュンターによると、伝統的哲学では無は存在一般の絶対的領域内にある暫定的な否定にすぎないから、無は存在のカテゴリー的状态へ移行する傾向がある。これに反して、キリスト教の立場から、人間の最高の形而上学的テーマは存在ではなくて、むしろ無である。したがって、存在者の根拠は存在にあるのではなくて、無にあることになる。無についてきわめて独特の思索を展開するのはハイデッガーであるが、ギュンターは彼に対して、彼の用語法、術語はまったく独我論的詩論に落ち入っていると云っている。事実、彼の中には独創的な考察があり、科学、論理学を拒否して、たとえば、ヘルダーリンの詩の中に、自己の哲学を見いだして行こうとする立場にあるから、そのように言えるかも知れない。

次にギュンターの排中律に関する考察は存在論的解釈になっているので、それを取りあげてみたい。彼はまず同一律について述べている。同一律は反照の対象がこの対象の性質によって主観的反照過程から独立した客観性を持つものとして自己同一となっていることを示す。だから、このことによって、その対象は自我の中の反照作用の生き生きした運動の過程から脱却している。(もちろん、このような自己同一を認めない人もいる。たとえば、H. リップス> しかし、反照問題と共に、その自己同一は出て来るのである。) この同一性が論理的に肯定される述語によって定立されるならば、この述語の否定は対象領域内ではなくて、反照過程内に帰属しなければならない。これが矛盾律の反照的、理論的意義である。同一律、矛盾律は、思考内の原理であるが、思考の体系的妥当領域とこの限界について何も語っていない。そのことを語れるのは、二つの矛盾し合う述語、つまり、その内の一方が対象を対象として確認し、他方がその対象の否定として論理的主語の反照状況を主張するような、その二つの述語の間に、第三のもの(述語)が体系的にも、原理的にも排中律によって排除されている場合である。この二つの述語は二値性を示し、存在と思考とが均衡した対称関係にあることから生じている。ギュンターは排中律の妥当性を一般的体系的動機から疑問視した最初の人としてヘーゲルをあげている。ヘーゲルは大論理学の中で、肯定を意味する

$+A$ と否定を意味する $-A$ との対立に無関係なる第三のものがあると言っている。 A はある物として $+A$ と $-A$ との区別に対して無頓着である。「この A は $+A$ でも $-A$ でもない、また $+A$ でも $-A$ でもある。したがって、 $-A$ でも非 A でもあるはずのある物は $+A$ にも非 A にも関係している。さらに、このある物が A に関係していることによって、それは非 A に関係していないはずであり、また、ある物が非 A に関係していることによって、 A には関係していないはずである。したがって、ある物そのものが排除さるべき第三のものである。すなわち、対立した二つの規定はある物の中に措定されていると共に、この措定の中で止揚されているから、ここで死んだある物という形態を持つ第三のものは、これをさらに深く突っ込んで考えれば、反照の統一であり、対立は根拠としてのこの統一へと還帰するのである。」(Hegel: *Wissenschaft der Logik* II S. 57) この第三のものという反照の統一は、客観と普通の意味の古典的論理的主観との直接的な対立から排除されるものであり、反照の対象(ある物)ならびに反照の過程(述語付与)を包含し、両者の対立を意識している。このような動的な反照作用の方向へ第一歩をしるしたのは数学上の直観主義である。これは数の古典的概念を無批判的に拡張することを拒否する。「反照する計数過程そのものが数の定義に関与されねばならないという洞察は、G. カントルの数プラトン主義に対抗した〈自由撰列〉のような方向転換によって明白となる。」(n. A. L. S. 128) ここにおいては、連続体、すなわち、すべての実数の集合は自由なる生成の媒介物である。完成と閉鎖とは自由なる撰択構成によってのみ限定可能であり、それ自体であらかじめ存在する諸対象の閉じた総括概念としての集合によってではない。このようにして、ある性質を持つすべてのものという G. カントルの概念実在論を否定することになり、排中律をも非難するようになる。したがって「第三のものは与えられい」は実在性を自然的存在、すなわち、絶対に客観的である存在と同一視する素朴な世界観の論理的原則であり、この存在を記述する場合には、反照する意識がそこに入っていないということにもなる。ギュンターはヘーゲルの反照理論を認めているから排中律を批判し、古典的二値論理学をも問題にする。普通、論理学において、真偽という二値が問題になるが、このことさえもギュンターにおいては批判の対

象になっている。(この点については、拙稿『弁証法論理学と記号論理学との関係について』 フィロソフィア 53, 129 ページを参照) 少なくとも三値論理学の形態をギュンターはとり、この中に解釈学的な考えを入れることによって、客観、主観の代わりに、ある物、自我、他我という三値を提出する。この考えは非常に大きな問題になる。それ故に、たとえば、H. シュミッツはギュンターを批判して、形式を問題にする形式論理学には主観、客観とか、自我、他我という具体的なものを入れるべきではないといている。(Philosophische Rundschau 9. Jahrgang Heft 4 以下 P. R. と略記する。S. 289 f.) しかし、ギュンターは、これに対して、とくに自我-他我の相関説に反対する人はサイバネティックス論理学の領域に入っていないからであるといっている。シュミッツの批判はそれなりに理由はあるが、しかし、形式論理学を限定することはいかなる立場で可能であるか。限定できることは、すでにもっとも具体的な自我が鮮明に挿入され、他我と区別されていることになる。東独の G. クラウスはギュンターの三値論理学を批判して、「総体的選言が現われるところのどこにでも、論理学は使用し得る。たとえば、存在と意識はそのような総体的選言であるから、両者のうちの一方に真であることを、他方に偽であることを付加し得る。電気の回路網における連結現象と遮断現象がそのような選言であるならば、真であることに連結を、偽であることに遮断を付加し得る。しかし、ここからは論理学そのものの妥当性と非妥当性に関する最少限のものは出て来ない。連結と遮断とが真であること、あるいは偽であることと同一であると主張するのはまったく無意味である。これと同様に、意識と存在とが真であること、あるいは、偽であることに関与しているということも無意味である。真であることと偽であることとは命題にのみかわる。……意識——物質を模写する状態にある意識——を作り出す(レーニンの意味で)物質があるということから出発すれば、著者(ギュンター)によって二値論理学の領域に対して述べられたすべての哲学的難問題は解消する」(Deutsche Literaturzeitung 83. Jahrgang Heft 9 Spalte 773) と言っている。しかし、ギュンターにとっては二値性の問題が実は解釈学的前提に立つことによって成立するという考えであるから、その根拠すなわち、論理学を成立させる哲学的根拠が洞察され、論議されなければならない

いであろう。クラウスは当然のことながら唯物論の側へ哲学的基盤を持って行くのであるが、ギュンターは唯物論と唯心論との二者択一は無意味となっているとさえ述べている。「人間の意識が何世紀にも渡ってかかわり合っていた精神と物質とのアンチテーゼは、今日哲学的問題としては消滅してしまおうとしている。その理由は、それが解決されたからではなく、むしろ新しい問題設定によって、それが乗り越えられると共に、それについての興味がなくなっているからである。」(G. Günther: *Bewußtsein der Maschinen* 1963 S. 15) この新しい問題はサイバネティックスの出現によって示されるものである。

次に述語論理学に対するギュンターの立場に触れてみたい。 $f(x)$ が抽象的表現であり、変項 x が拘束されていないのに反して、 $(Ex)f(x)$ では x が拘束され、一定の値を持ち、個物が存在可能になっており、存在所与の総括として経験的存在者にかかわっている。そこで Ex の中の x は肯定的な観点に立ち、 $(Ex)f(x)$ は抽象的形式的表現ではなくて、偶然的、質料的なエレメントを表わしているというのである。

$$(x)f(x) \supset (Ex)f(x) \quad (1)$$

(1) のような全称命題と ^{エクステンツ}存在命題との関係は $n > 1$ 個の客体 x が、 $(Ex)f(x)$ の通用する世界の内にいるということを仮定する場合にのみ存立し得る。換言すれば、存在という概念が形式論理学の形式内で展開されるには、思考する意識にとって実際に存在者があることが必要なのである。なぜなら、思考する反照には論理的テーマである存在があるのみで、^{エクステンツ}事実的な存在に直面せず、したがって、反照する意識には実在する自己同一の対象が対立しないから、 $(x)f(x)$ と $(x) \sim f(x)$ という逆の表現は同時に真でなければならないであろうからである。これを裏付けるためにギュンターはライヘンバッハを出しているが、ライヘンバッハにおいては、 $f(\hat{x})$ は命題関数であるが、 $\hat{x}$ は、たとえば「……は背が高い」という場合と同じで $f(x)$ とならない。したがって、 $f()$ と言ってもよいというような記述が見られる。この考えを前提にして、ギュンターが上記の表現をとるならば f に関して、 $\sim f$ をも示すのは不適当とも思われるが、 x が実際の存在者に会っていないので、そのようになると考えられる。

われわれが生活している偶然的世界のうちでは個物（客体）はつねに経験的存在者であり、そして存在一般は、形式的テーマにすぎないが、われわれにその客体を考えさせる意味なのである。このことは、ギュンターがヘーゲルの自己への反照にこの存在の意味を相応させていることと同じ考えであるが、この点はギュンターの重要な哲学的立場になっているといってもよい。さて、唯一の個物のみを含む普遍者においては、両者の区別が廃棄されて、存在一般が唯一の個物となる。これは古典的形而上学では反対の一致（coincidentia oppositorum）であるが、これは

$$(x) f(x) \equiv (Ex) f(x) \quad (2)$$

と表現し得る。ここでは存在概念と全称概念とは相互に内含し合って、演算子を必要としなくなるとも言える。

(2)に基づいて排中律が確立されていることを考えてみると、(2)を考えた場合に存立する反照段階と多くの個物を包括する現実性にかかわる反照段階とにおいて、全称と存在との間の矛盾的、選言的關係は次の二つの表現によって示される。

$$(x) f(x) \equiv \sim(Ex) \sim f(x) \quad (3)$$

$$(x) \sim f(x) \equiv \sim(Ex) f(x) \quad (4)$$

実在性の形式が唯一の個物のみを包括し、(3)と(4)とがその形式とみなされたとすれば、 $(x) f(x)$ と $(Ex) f(x)$ との区別はなくなる。また、そこから全称演算子と存在演算子とを除去すれば、次のような単純な関係が残る。

$$f(x) \equiv \sim f(x) \quad (5)$$

(5)はパラドックス的な表現であるが、そこには反照問題がある。全称演算子は存在一般、反照を産出する。それには個別的、経験的対象が先行し、すでに含まれていて、それはこのものでしか語れないものであるにもかかわらず、ここから離れている限りで、全称演算子である。「すべての x は」に力点があるので、規定作用が現われ、存在一般、反照が問題になってくる。したがって、偶然的世界の中の個別的、経験的な存在者としての「一つの x も存在しない」ことになる。

他者への反照が自己への反照になっているわけである。したがって、 x が自由変項としてある(5)のような表現がとられるといえる。また、ギュンターは、量化記号で示した排中律の例として $(Ex)[(fx)v \sim (fx)]$ をあげている。これに対して、シュミッツは攻撃的な批判を行なっている。シュミッツは、ギュンターが $pv \supset p$ を古典的な命題計算上の普通の表現であるとしているが、それ以上、それを検討していないと述べ、 $(Ex)[(fx)v \sim (fx)]$ は「どの性質に対しても、当該性質を持つか、あるいは、持たないある対象が存在する」という意味であり、排中律の意味とは類似していないと言っている。さらに「哲学的伝統の中に——過渡的なものといわれるであろうが—— $pv \supset p$ と同じ意味を持たないで、排中律として常に語られる表現がある。それに帰属するものとして、アリストテレスの叙述がある。すなわち、それは、どの性質もそれぞれ、どれか一つの事態に適合するか、あるいは、適合しない。(1011b24 ἀνάγκη ἢ φάναι ἢ ἀποφάναι ἐν καθ' ἑνὸς ὁτιοῦν.)」(P. R. S. 290 f.) シュミッツはこれを次のように表現している。

「 $(f)(x)(x \in f \vee x \notin f)$ (1) [$\in$: 連語 $\notin$: 否定された連語]」

(1) は性質のみにかかわるから、 $pv \supset p$ より狭義のものであるが、 $pv \supset p$ は排中律として、その意義からいって、諸関係についての文にも広がる。(1) との密接なつながりから、伝統的に一様に排中律として取り扱われる形式(ある物は A であるか、あるいは、非 A であり、第三のものはない) (Hegel: *Wissenschaft der Logik* II S. 56) が展開される。(P. R. S. 290 f.) (1) のよりどころになる例として「このバラは赤いか、あるいは、赤くない」がある。しかし、ギュンターは「このバラは赤いか、あるいは非-赤である」という実例を出しているので、 $(x)(f)(x \in f \vee x \notin f)$ となり、これでは不適當であるとシュミッツは考えている。ただ、このようになるにしても、 x と f とのつながりが問題にならないだろうか。(1) 中の x は、ある物であり、それについての性質がどのようにしてそれにつながっているかが根拠にあって初めて、 $x \in f$ が成立しているのである。 $x \in f$ は普通客観的对象であると考えられているが、このことを熟考してみると、他者への反照としてのあるものについての、自己への反照としてのあるものであったのである。したがって、それは対象であると同時に、意識内容であるという形をとり、選言

が連言となり得る。また、形式的にいて、 $x \in f$ である限り、 x が限定されている。しかし、 x は f でないからこそ、 x である。 x は f のみで表現されることに本来無関係である。関係づけることが判断ではあるが、このことによって x は分割されている。したがって x 自体は、自己への反照となることによって、 x ではないという形で f であり、 x 自体であるという形で f ではないのである。

ギュンターにおいては、 $(x)f(x) \supset (Ex)f(x)$ と $(Ex)[(fx)v \sim (fx)]$ は複数の個物を含むすべての普遍者に対して妥当するし、また、全称と存在とが一致するという性質を入れることによって、唯一の個物を含む一つの普遍者に対して妥当する。しかし、絶対に対象のない世界を前提する場合にのみ、妥当しない。さらに、排中律は $(Ex)[(fx)v \sim (fx)]$ が示しているように、いつも存在演算子との関連においての式で表現し得る。 $(Ex)[(fx)v \sim (fx)]$ の中の (Ex) を (x) にして、そして、 (x) は存在演算子による規定に換えられえないとすれば、排中律は維持され得なくなる。なぜなら、そのように換えて限定され得ない全称演算子は、反照過程、すなわち、変項のその都度の拘束を超越し得る過程をいつも含むからである。直観主義の功績は、排中律の前提として、関数計算が積極的に、確定された変項値によって拘束されるように、反照過程が拘束されなければならないとした点である。このような考えを持つギュンターに対して、シュミッツが伝統的な立場で攻撃しているところに、諸種の問題が内蔵していると思われる。問題の一つとして、ヘーゲル論理学の形式化の是非があり、ギュンターは形式化の方向を推進しようとするのに反して、シュミッツは形式化を困難なことであり、形式化したのではヘーゲル論理学に達しないとしている。しかし、いずれにしても、ヘーゲル論理学をまったく否定してはいないところに思考の別形式が潜んでいることも確かである。ヘーゲル論理学は内容論理学であるとして、それを形式化したM. ペンゼ、弁証法論理学は内包を取り扱うものであるとしたG. クラウス等はシュミッツとは別の方向を進んでいるが、ここではそれらを論ずる紙面の余裕がない。しかし、ここに出てきたヘーゲルでは、意識を問題にした精神現象論も、思考を問題にした論理学も存在を出発点としている。とくに、後者において、初めは無反照的な存在の概念なるものがただちに、それは反照によって無規定性、

すなわち、純粹無であるとして現われる。こうして存在と無とが同一になる。これは $p = p$ という命題における同一ではないといえるけれども、言語としては付加語の用法もある。この形態で述語は主語と一つになっている点に注意しなければならない。ギュンターにとって、その同一性の根拠になるのは、存在が反照そのものであるということである。「存在において直接性と否定とが一つになっている。二つの契機はそこでは相互に区別されていない。両者はまさに直接的に同一のものである。存在の問題は意識において二つの相互に対立した反照体系においてのみ表現され得る。すなわち、それは 1) 本来的 (ortho) テーマである他者への反照と 2) 疑似的 (pseudo) テーマである直接的、自己への反照である。」(n. A. L. S. 285 f.) 彼はこのようにして、さらに他者と自己とへの反照としての、自己への反照が取り扱われる。この 1) と 2) とは、ドイツの代表的な言語哲学者 B. リーブルックスの考えに類似していることだけを注意しておく。「ある物になるほど私によって措定されている。すなわち、精密に規定されているが同時にまた規定されていない。すなわち、私によって意識して措定されていない。」(B. Liebrucks : *Sprache und Bewusstsein* 3 S.49) において、規定されている方が 1) で、規定されていない方が 2) に類似するのである。

以上のようにして存在問題と論理学との関連は哲学的思索の場を与える契機となる。ここでは、その契機の提示にとどまるかも知れないが、その思索の動機として反照論理学の問題を取りあげたわけである。そこから生ずる動的な思考をいかに検討すべきか、論理的一義性はいかに考えるべきか、等々まだ問題が残っているが、これらは別の機会に譲りたい。

筆者紹介：

昭和3年3月20日生まれ。昭和30年、早稲田大学卒業、昭和35年、早稲田大学博士課程修了。現在、早稲田大学講師。

主要訳書論文：

グロックナー『ヨーロッパの哲学』(共訳)、「存在についての一考察」(『フィロソフィア』43号)、「弁証法論理学と記号論理学との関係について」(『フィロソフィア』53号) その他。